

論文概要

平田 淳也

1. 論文題目

上肢運動器疾患患者の日常生活活動能力向上に対する介入方法考案のための研究
(2015年3月学位取得、博士〈リハビリテーション学〉)

2. 論文概要

上肢運動器疾患のリハビリテーションにおいて効果的に日常生活活動(Activities of Daily Living : 以下、ADL)能力の向上を図るためには、介入する因子について検討する必要がある。そこで本論文では、まず、上肢運動器疾患である手根管症候群患者の ADL 能力に関連する因子を手術前・後で検討した。手術を施行する 58 名を対象に検討した結果、手術前では握力と痛み、関節可動域(Range of Motion : 以下、ROM)が、手術後では握力と痛み、不安感が影響していた。このことから手根管症候群患者の術後の ADL 制限は、握力低下や痛み、ROM 制限といった身体機能の低下だけではなく、不安感が関与していることが示された。そのため術後のリハビリテーションについては、身体機能の改善のみならず不安感を軽減することで効果的に ADL を改善できる可能性が考えられた。

これらの結果を踏まえ、身体・心理機能に対して介入を行い、その効果を検討した。49 人の手根管症候群術後患者を介入群と対照群に無作為に割り付けた。対照群には、術前の診察時に医師が術後管理について指導を行った。介入群にはこれに加えて、手指運動指導と不安感の軽減を目的とした ADL 指導を行い、これらの内容が記載されたパンフレットを配布した。その結果、対照群と比較して介入群では、身体機能の改善と心理機能の改善はみられたが、ADL 能力に改善はみられなかった。このことから、本研究で行ったリハビリテーションは十分とはいえず、ADL 能力に関連する因子をより詳細に調査してリハビリテーションの内容を再考する必要性が考えられた。

そこで、効果的な介入方法開発のための基礎的資料の作成を目的として、上肢運動器疾患における心理因子の影響を再考した。まず、ADL 能力に強く影響している痛みの強さに心理因子が予測因子として有用であるかを検討した。上肢運動器疾患に対して手術が施行された 52 名を対象として、リハビリテーション開始時に不安感、抑うつ、破局的思考を測定し、術後 8 週目に痛みの強さを測定した。痛みと心理因子の関連を検討した結果、破局的思考が予測因子として抽出された。このことから、早期に患者の破局的思考について評価を行うことは、慢性痛予防に対して有用であると考えた。

今後は、対象患者を均質化してどのような疾患でも破局的思考が痛みの予測因子として適用できるのか検討する必要がある。更に破局的思考は、痛みに影響して間接的に ADL 能力に影響を与えるだけではなく直接的に ADL 能力に影響を与える。そのため、破局的思考と ADL 能力の関連についても検討を行っていく必要がある。